

弥一郎は、思い出すのも忌まわしい姫路城下近くでの事件から、百姓という身分層を毛嫌いしていた。

「だが、この者たちは別のようだ。……あいつらとは違う」

近頃、そう思うようになってきている。またと きには、蛤やうなぎが手に入ることもある。おかげで、粗食で衰えていた弥一郎の四肢も、以前のたくましさを取り戻しつつあった。

しかし、こんな好ましい状況がいつまで続く喜ばれようとは、実のところ想像もしていなかったのである。門下生が自分に向ける「先生」という言葉を口の中で繰り返してみた。面映いが、心地よい響きがある。

小窓から見える木々の紅葉も、馴染んだ枝から色あせた葉が落ち始めている。厳しい冬の訪れの気配が、そこかしこにあった。弥一郎は激しい焦燥感に襲われた。道場さえあれば、武運と才覚で道は開けるように思える。だが、それにはまともった金が要る。たとえ、いまの仕事が自分のあ

ことか、と弥一郎は不安に襲われる。自分の高まるにつれ、師範代となっている戸田流の高弟にとつて面白くなくなってくるはずだ。いや、あの男のみではない。ここは小さいながらも戸田流の支部道場である。弥一郎の剣は直心流。他の流派に奪われたくないという意地もあるろう。とすれば、おっつけ面倒なことになりかねない。

「誰にも邪魔されない自分の道場を持ちたい」  
弥一郎は心の中でつぶやいて、溜息を漏らした。習い覚えた剣技を教えることが、これほど人々に食っていくのことに足りるだけである。以前のように手内職にあくせくしないでよくなったくらいで、毎夕、食膳に酒を添えることすらままならない。弥一郎はやるせない気持ちになった。そのとき、道場の外で案内を請う大きな声がした。弥一郎は思いを振り払って、間口一間ほどの玄関に出た。

そこには、いかにも武芸者ぶりの、目尻が吊り上がった利かん気そうな胸の厚い二十半ばの若

侍と、頬骨の出た四十に手が届きそうな武士が立っていた。年長者のほうは、穏やかな表情を装ってはいるが、瞳の奥に冷たい光が見え隠れしている。まるで品定めでもするかのよう、弥一郎に鋭い視線を送ってきた。

「それがしは遠藤右近、この者は佐島新八。一手、ご指南に預かりたい」

内心、ほう、とつぶやいて、弥一郎は二人を代わる代わる見た。隙のない身構えからして、かなりの修練を積んだ武者に見て取れた。特に遠藤右

「貴公で構わぬ」

佐島新八という若い武士が、短気そうに弥一郎の言葉をさえぎり、睨みつけてきた。その横柄な態度に弥一郎は腹が立った。こめかみのあたりが熱くなるのを感じたが、感情を押し殺した。

「他流試合は禁じられておりますゆえ」

「戸田流ではそうであろう。しかし、お手前の流儀ではどうかかな」

遠藤が鼻先で笑った。弥一郎は驚いた。この男は、自分が直心流を使うことまで知っているよう

近と名乗った年長の武士のほうは、かなりできさうである。鋭い眼光からすると、単なる指南を望んでいるわけでもあるまい。

「いまどき珍しい。道場破りか」

立ち合ってもよいと思ったが、師範代のいないいま、ことを起こしては、勝つても負けても面倒に巻き込まれる。弥一郎は、相手の刺すような眼差しを受け流して微笑んだ。

「師範ならびに師範代が留守にしておりますれば、本日のところは……」

な口ぶりである。

「いったい此奴らは何者なのだ。どこまで自分のことを知っているのか。いつから……」

疑問が四肢を緊張させた。佐島が畳みかけるように言った。

「さては、臆したか」

弥一郎は、抑揚に隠しきれない訛りがあるのに気がついた。自分がよそ者であるために言葉には敏感である。それは一度も耳にしたことのない訛りだった。南の方ではないか、と頭に閃きかけ

たが、いまの弥一郎にとってはそんな詮索などど  
うでもよかった。佐島の発した「臆した」という  
言葉が、一時期にせよ、剣に生きようと決意した者  
の自尊心を傷つけた。

弥一郎は儼然として、先ほどまでの分別はどこ  
へやら、見知らぬ者たちを道場の板敷きに招じ  
入れてしまった。胃の中が、焼け火箸を突っ込ま  
れたように熱くなっている。

「得物をお取りください」

弥一郎は、通常このような際に用いる袋竹刀  
わず、片隅に置いてある太刀を取り上げた。  
道場の中央に進んで抜き合わせ、中段に構え  
た。と同時に、佐島は、甲高く鋭い気合いを入れ  
て斬り込んできた。肩口に無造作に持ち上げた剣  
を、そのまま叩きつけてくるような、強烈な打ち  
込みであった。その太刀筋が一瞬にして先夜の  
屈辱を思い出させていた。

〈あのときの男に相違ない〉

弥一郎は敵の剣先を見切っていた。彼の身体が  
わずかに揺れたかと思うと、剣が蛇のように下方

ではなく、道場の板壁に掛けてある檜の木刀に  
近寄った。命を賭す覚悟である。

「真剣にてお願い申す」

背後に佐島の突き刺すような声が聞こえた。息  
をのんで振り返り、まじまじと声の主を見た。  
若者が目じりを一層吊り上げ、傲慢そうに顎を  
突き出している。

新たなる怒りが込み上げてきた。先ほどの侮辱  
といい、真剣を所望することといい、自分はそれ  
ほど侮られているのかと思った。弥一郎は何も言

にくねったあと、鎌首を持ち上げて跳ね上がった。  
斬った。が、ほとんど手応えがない。

〈踏みこみが浅かったか〉

十年前であれば、こうはならなかった、と  
弥一郎は思った。それまでの長い年月、剣を取ら  
なかつた技の遅れは、田舎道場で少々身体を動  
かしていたくらいでは、取り返せないほど大きな  
ものだったのだ。弥一郎は強い自己嫌悪の念に駆  
られた。それを癒す手立ては、一つしか考えられ  
なかつた。目の前の敵を次の一撃で見事に仕留め

ることである。

佐島は、攻撃の勢いのあまり、そのまま二、三間進み、空足を踏んで振り向いていた。蒼ざめた顔をして、片手で脇腹を押さえている。その指の間から血が滲み出ているが、どうやらかすり傷のようだ。顔色の悪さは、傷のためと言うよりも、自分の剣技が破れた敗北感から来るものらしい。幾度か大きな息をして胸の喘ぎを鎮めたあと、佐島は剣を右肩先に担ぐように持ち上げ、その位置で止めた。悲愴な顔つきになっている。

が失せ、佐島の身体が芯を抜いた人形のように床に落ちて両手をついた。遠藤が笑顔を浮かべて近寄ってこようとしたり。

「いやはや、お見事でござる」

満面に笑みをたたえてはいるが、冷たく弥一郎を見据えている。目の前の床に手をついている敵よりも、技量が数段上に見て取れた。自分の剣技が果たしてこの男に通用するだろうか。そんな疑念が沸々と湧いてきた。弥一郎は思わず身震いした。試してみたいと思った。

来る、と弥一郎は思った。

〈今度こそ存分に打ち込んでやる〉

弥一郎の表情がみるみる険しくなった。瞳に、剣を構えている相手の姿だけが、くつきりとした輪郭を伴って見え始めている。殺気が頂点に達した。

「それまで」

横合いから鋭い言葉が飛んだ。

「もはや勝負はあった。これにて刀をお引き願いたい」

一瞬のうちに、道場に張りつめていた緊迫感

「あなたもお仕度を願いたい」

「いやいや」

遠藤は、片手を顔の前で大きに振った。

「身共など、所詮、お手前の敵ではない。苦も

なく打ち倒されましょう」

歯の浮くような世辞を言った。

「その腕を見込んで、お願いしたきことがござる」

先刻までの殺気が、まやかしのように消えている。あの日の夕刻の邪魔だてに對する報復ではないらしい。「ぜひにも」と所望され、戸惑いながら

も弥一郎は、彼らを道場の奥にある四畳ほどの小部屋に案内した。だが、油断は禁物である。巡礼姿の男を包み込んで殺害したほどの者たちだ。

いつ、豹変しないとも限らない。弥一郎は、居ずまいを正しながら、刀を左腰に引きつけた。

しかし、その懸念も無用だったようである。座に着くと、遠藤が年長者らしく穏やかな口調で、高圧的な態度で試合を挑んだことの無礼を詫びた。

## 六

構えから、激しい気合いとともに繰り出される鎧兜をも叩き斬るような攻撃を受けたからに他ならない。

(以上2月18日放送分)

弥一郎に敗北を喫した佐島新八は、表情から傲慢さが消えたものの、拗ねた目をして戸口の襖を見ている。遠藤右近が、実は自分たちは薩摩藩の武士だが、と話を切り出した。

やはりそうか、という思いで弥一郎は聞いている。あの縄暖簾前の広小路で立ち合ったときの剣さばきから、島津家中ではないかとの疑念があった。それが、ついでしたがたの立ち合いで、噂に聞く薩摩示現流の太刀筋に違いないと確信するにいたった。それは、構えとも言えないような独特な